

天遊

大阪教育大学 広報誌

VOL.4 2005. AUTUMN



《特集》

法人化で大学はどう変わったか

特集

法人化で大学は

どう変わったか



平成16年4月1日、全国の国立大学はすべて国立大学法人に移行し、大阪教育大学も法人格を持つ大学として新たなスタートを切りました。

それまでの国の行政機関としての様々な規制が緩和され、大学の自主性、自立性、自己責任のもと、公私立大学を含む競争的環境の中で個性豊かな大学づくりに取り組み、そしてその成果が問われることとなりました。

教職員は国家公務員ではなくなり、大学運営のシステムも変わりました。また、法人化を契機に教職員の意識にも変化が現れ、様々な面で大阪教育大学は変わろうとしています。

法人となつて1年と半年余り、大学はどう変わり、またどう変わろうとしているのでしょうか。

国立大学法人法に基づく制度面や運営面などの変化や法人化を契機として取り組みはじめたことなどについて、紹介していきたいと思います。



運営体制

法人化に伴い運営体制は大きく変わりました。これまで国立大学では意識されてこなかった経営や戦略といった観点からの大学運営が不可欠となり、中長期の展望を見据えたうえで迅速な意思決定と実行が大学の事業展開にとって、またその将来にとり重要な要素となりました。

法人化前は主に教授会を中心に大学の意思決定をし、大学運営を行ってきたが、替わって現在は学長の他に新たに役員として理事や監事が就任し、また学長を中心に役員会、経営協議会、教育研究協議会が置かれ、そこで大学全体の教育研究や管理運営に関する審議や意思決定を行っています。

また、それまで学外の方々から意見を聴き、それを大学運営に取り入れる機会はその多くはありませんでしたが、現在は役員のうち理事1名を学外から登用し、監事2名も学外の方です。経営協議会委員の半数も学外有識者の方々に務めていただき、様々な厳しい意見や提言、提案を出してもらっています。

運営体制が変わったことで、それまでやや乖離していた面もあった社会の常識と大学の常識を近づけ、社会からの要請や期待を的確に把握し、それに応えていく大学づくりを目指しています。

目標・計画

6年間の中期目標が文部科学大臣から提示され、各国立大学はそれを達成するための中期計画を提出して認可を受け、さらに6年間の各年度について年度計画を届け出るというシステムが導入されました。各年度終了時には、目標達成に向けた事業が計画どおり進行しているかどうか、また6年間終了時には目標が達成できたかどうかの評価を受けることとなっています。

それまで本学には明確な形での中期的な目標がなく、解決すべき課題や取り組みが事業の中で埋没しがちな面もありましたが、いわば国民との約束という形で、使命としての目標・計画が定められ、その使命に対して国から運営費が交付されることになりました。

大学の諸活動は勿論、目標・計画がすべてではありませんが、目標に向かって業務を進め、進捗状況を確認しながら結果を検証し、評価を受けて改善するといった一定のマネジメントサイクルが可能となりました。これを活かせる大学と活かせない大学とではこれから様々な面で格差が広がっていくこととなります。評価の芳しくない大学に対しては国からの交付金の削減が予定され、場合によってはその存続すら認められないこともあります。

大阪教育大学は平成16年度の実績に対してすでに、「計画通り進んでいる」、「または、おおむね計画通り進んでいる」との評価を受け、現在平成17年度の計画を遂行しているところです。

目標達成はそう容易ではありませんが、計画を着実に実行し、社会における本学の存在意義を確実なものとするべく活動を続けています。

財務

国の行政機関として予算が配分され、人件費を含めて事業の遂行に必要な経費が確保されていたものが、法人となったことにより国からは運営費交付金が交付されることとなりました。

国の予算は使用目的が定められていたため他の経費に流用することが出来ず、また科学研究費補助金や奨学寄附金といった外部資金を除き、授業料収入などは大学の収入ではなく、国の収入として扱われてきました。一方、運営費交付金は原則大学の判断で自由に使い、授業料収入も大学の自己収入として扱えることとなりました。しかし、運営費交付金には当然自己収入分相当額は含まれておらず、またその額は毎年約1%ずつ削減されていくことが決まっています。そのため自己収入の確保や外部資金の獲得、

人的資源を含めた資産の効果的な活用といったことが、各国立大学にとってこれまでなかった「経営」という新たな課題となりました。

大阪教育大学では、毎年約100億円前後の予算配分と約2億円の外部資金で大学を運営してきましたが、法人化初年度の平成16年度は約68億円の運営費交付金が国から交付され、他は授業料収入や寄附金、科学研究費補助金といった外部資金により大学の運営を行いました。平成17年度も同様約68億円の運営費交付金と約33億円の自己収入を見込んでいます。

法人となったことで、教育研究活動を継続的に行うためには大学自らの努力で財政基盤の安定を図ることが不可欠となりました。

業務の効率化や経費節減の推進のみならず、大学の評価を高め、その価値を高めていくことで、受験生の減少や学生の定員割れ企業等からの研究資金の減少などが生じないよう、学生に対する教育の充実はもちろんのこと、地域への貢献、社会との連携など、大学の持つ潜在力を多方面に活用していきたいと思っています。

学生支援

学生に対する考え方も変わってきました。これまで国立大学では私立大学に比較して学生への支援に対してはあまり比重が置かれてきませんでした。特に学生にとって関心の高い就職に関してさえ、あまり積極的な取り組みは行われず、企業の採用担当者がある国立大学を訪れ、就職担当の部署はどこかと尋ねると「ない」という返答に、唖然としたということもありました。

大阪教育大学では、他の国立大学に比べ早くから就職支援担当者を置くなどして、学生からの様々な相談や情報の提供な

どを行ってきましたが、それでも学生から不満の声がないわけではありませんでした。法人化が、大学にとって学生がいかに大事なものであるかを再認識する契機となり、今では、学生にとって有益かどうか、学生のためになるのかどうか物が事を決める一つの大きな判断要因となっています。

この4月には学生課を学生サービス課に名称変更するとともに、課外教育支援グループ、学生生活支援グループ、就職支援グループにグループ化し、学生サービスの強化を図りました。修学支援についても同様、担当課のグループ化によりサービスの強化を図っています。

就職支援については特にサービス強化

を図るため新しくキャリアサポートデスクを設置し、学外から登用した専任の職員が常駐することで常に学生からの相談や助言ができる体制を整えました。キャリアサポートデスクはいつも、多くの学生で賑わっています。



この他、大学ホームページや電子メールを利用した学習相談の実施に向けた取組みや指導教員制、オフィスの充実を進めるなど、学生から選ばれ、支持される大学を目指しています。

評価

大学と評価は、これまでも不可分の関係にありました。大学が自ら行う自己点検・評価は義務であり、学外者から評価を受ける外部評価も努力義務となっていました。



大阪教育大学では法人となるまでに2年ごと計5回の自己点検・評価を行い、外部評価も1度実施しました。

法人化によりこれまで行ってきた自己点検・評価が大きく変わるわけではありませんが、新たに目標・計画の達成状況に対する評価が実施されることとなり、また、大学の質を保証するため、学外の認証機関（文部科学大臣から認証を受けた機関）がすべての国公立大学を評価する制度も導入されました。

これらの、組織を点検・評価

する制度への取組みに加え、大阪教育大学では教職員個人々々を評価する取組みも進めています。事務職員にあつては年度当初に自らの目標を明確にし、それに向かつての取組みや達成度を年度末に点検・評価することをこの4月から実施し、大学教員にあつては、授業や研究の諸活動、大学運営や社会貢献の実績などをもつて評価する制度を平成18年度から実施することとしています。

これら組織の評価も個人の評価も、単に評価結果を得るためではなく、自らの点検作業を通じ、また結果を受けての改善を前提としています。評価制度を活用することで大学の現在を明らかにし、そ



して社会が求める大学の実現に向けて自ら課題を見出し、それらに対して前向きに取組むことで、常に向上を目指す大学づくりを進めています。

情報発信

教育研究活動を含め大学が行っている諸活動は、これまで学外からは非常に見えにくいものでした。平成15年度に地域の方々と高校生などを対象に本学が行ったアンケート調査の結果もそのことを示しています。これは大学から積極的に情報の発信が行われてこなかったことが要因だと考えられます。法人化を契機に社会への説

明責任を果たすことが求められる中、こうした事態に対処するため各国立大学とも広報活動の充実に取り組んでいます。

この広報誌「天遊」も、大阪教育大学のことをより知ってもらうため地域向けに発行しているもので、平成16年4月、法人化に合わせて創刊しました。それ以外にもホームページを活用した情報発信にも力を入れ、誰からも見やすく、利用しやすい有益なホームページ作りに取り組んでいます。平成16年9月には、民間のコンサルティング会社が実施した、全国大学サイト・コンパリエイ（使いやすい）調査2004において、全国立大学中最も高い評価を得ることができました。また、大学教員個々

の教育研究活動やその他諸活動を広く知ってもらうことと、それを大学の持つ知的資源としてより社会に還元できるように、大学ホームページに「研究者総覧」のページを設け、平成17年6月から公開しています。

大阪教育大学では、公開講座をはじめ、地域の方々が参加できる催しもホームページを通じてお知らせしています。大学が行っている各種の取組みや諸活動についてもさらに知っていただくことで、地域に根ざした、地域に支持される大学を目指しています。



大阪教育大学ホームページ

作品の表現論理を求めて、伊勢物語

日本・アジア言語文化講座教授

神尾 暢子 かみおのぶこ

どの言語で書かれたにせよ、どの時代の成立にせよ、作品研究の醍醐味は、その作品のなかにある表現論理を明らかにすることだと考えます。そのための切り口は、多様でしょう。私の場合、高度で

難解な問題を設定して解明する方法を取ることは出来ません。平易な、いわば、誰にでも出来るような問題を設定して、試みています。

伊勢物語によって、その一例を説明いたしましょう。平安時代の初期に成立したと思われる伊勢物語は、主人公である「をとこ」の一代記ふうの物語で、藤原定家本では、一二五の章段によって構成されます。「をとこ」と一般呼称される男性と女性との恋愛が、物語の中心素材です。でも、少数ながら、男女の恋愛以外を素材としたり、登場人物を、実名や官職で呼称するといった、例外的な表現をする章段があります。

なぜ、このような例外的な表現方法がとられるのでしょうか。例外には、例外の意味があるはず。学生時代に、恩

師から、「コップ一杯の純粋な水に一粒の塩を入れれば、純粋な水でなくなることを譬えとして、物事の本質は、多数が決定することもあるが、少数が決定することもあると、お教えいただきました。」
この考え方によって、恋愛を素材とする大半の章段に対して、恋愛を素材としていない少数の章段の存在、および、登場人物を一般呼称する大半の章段に対して、登場人物を実名や官職などで何某と特定呼称する少数の章段の存在は、伊勢物語に潜在する本質を示唆すると仮説し、検証したのです。

結論をいえば、実名や官職などで特定呼称する少数の章段には、共通して、藤原良房や基経といった藤原北家主流に対する、体制批判になる表現が存在します。とくに、北家を外戚として、その栄華をもたらず契機となった清和天皇は、その女御である藤原高子と「をとこ」の男女関係や在位中の安泰を独身で祈念するはずの斎宮と「をとこ」の男女関係などを素材として、多角的に批判されるのです。そこでは、恋愛も、政治性を帯びています。

ところで、この体制批判は、讃美と批判との両義性のある隠微な方法で表現されています。讃美にならないと非難される表現には、必ず、弁解が用意され、その弁解は、周囲に了承される仕組みなのです。言い換えると、讃美であるとの説明を必要とするほど、その表現は、陰湿で微妙だといえましょう。これが、伊勢物語の表現論理です。

伊勢物語は、ある「をとこ」の女性遍歴の物語ではなく、北家主流に対する敗者の怨念の文学であることが、この観点からも検証しうるのです。



表情に問いかけ続ける「染付」

美術教育講座教授 稲富啓一郎



陶芸に関心をお持ちでない方でも「染付」という言葉はご存知かと思えます。あと「釉裏紅」という言葉をご存知の方も、数は多くなくともいらっしゃると思います。「染付」と申しますのは、「ゴス」と呼ばれるコバルト顔料で素焼きした形態に絵や模様を描き、その上に透明釉を施し、1300度の温度で還元炎焼成した作品を言います。焼き上がりは、白地に青の模様が浮き出ます。また「釉裏紅」と申しますのは、炭酸銅を発色材とした、焼

き上がりが白地に赤の模様が浮き出る物の事で、焼成方法は「染付」の場合と同じです。現在この二つのことについて研究を続けています。ここでは、世の中に認知度が高く、また一般にも殆どの家庭で「染付」の飯碗や皿といった器を使用していらっしゃると思えますので「染付」について書いていこうと思います。

「染付」技法が完成された形で世に出てくるのは、中国の宋時代からです。当時から近代に至るまで「ゴス」は天然の物を使用していました。おもに西アジアで採れたものがシルクロードを通じて中国にもたらされていましたが、非常に高価な物であったため、材料として、たとえば宮廷で使用するものであってもそれほどふんだんには使用できなかったようです。

そのため、出来るだけ少ない量で効果的な技法が考えられました。現在は、天然ゴスは、殆ど全くとっていいほど採れなくなり、代わりに合成ゴスが一般的に使用されています。当然、合成ゴスは天然ゴスに比べ価格が安く使用しやすい材料になりました。にも拘らず、現代の染付技法としては、今もって昔の技法が幅を利かせている状態です。私は、豊富に「ゴス」が使用できるのであれば、当然その技法も変わってきてよい筈だと考えています。「ゴス」をこれまでのような使い方ではなく、豊富に使用する事でどのような表現が可能なのか、またその表現のためにどのような技法が考えられるかということを考えていかないといけないと思っています。描くモチーフや形態もそれに伴って変わってくるのは当然ですが、どんなに変わっても人が使用して心が豊かになるものでないといけない筈です。一般家庭で使用される焼き物であるからこそ、そのところを外さないように気をつけたいといけません。

その事について、今も心がけている事があります。

私が学生の頃、陶芸に関する技法について恩師の先生にいろいろ質問していた時、その恩師は、陶芸技法のいろいろについてそれほど大切な事というのではない。

それより君達が考えなくてはいけない事は、陶芸の在り方である。」という内容のことを言われました。今は自分なりにその回答を見つけていますが、これからまた変わっていくかもしれません。しかし率直なところ、技法があつていろいろの形態があると考えると質問していたわけですから、当時の私にはその言葉が理解できませんでした。

粘土は種類によっていろんな表情を持っています。また焼成する事で新たな表情が現れてきます。そのところを、「なぜ？」と問いかけ続けていくことで「陶芸の在り方」が理解され深まっていくのかなあと思っています。



上 「蓮大皿」径55センチ(ろくろ成形)
花や葉の部分をマスキングで伏せ、ゴスをお茶で溶いたものを表面にかける「墨流し」を施した後、筆で加彩している。



左 「梅花器」高35センチ(ろくろ成形)
少し強い調子で枝を書き、花の部分はマスキングで抜いている。

ドイツ語初級

(Deutsch macht Spaß!)

ドイツ語は楽しい!



大阪教育大学では英語以外の外国語の学習(ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語)にも力を入れています。ドイツ語では、初級で基礎を身につけ、中級で知識を増やし、さらに上級でビジネスに活かせるレベルを目指します。

欧米言語文化講座助教授

赤木 登代^{あかき とよ}

わたしの担当するドイツ語初級では、初心者を対象に現代のドイツ語をABCから会話表現を中心に学んでいきます。ドイツ語は主にヨーロッパ、すなわちドイツ、オーストリア、スイスといった国々で使われている「生きた言葉」で

すから、まずは発音・アクセントをしっかりとマスターすることから始めます。第1講では発音、特に「舌をぶるぶる震わせること」と「水なしのうがい」の練習に重点が置かれます。(※Rの発音です)

また授業では簡単な文法学習・会話練習と並行して、ドイツ語圏の文化に関する情報も盛り込んでいます。「ドイツといえ

ば?」と学生に尋ねると、「ビール!」、「ソーセージ!」、「ベンツ!」、それに最近ではワールドカップの関連で、「サッカー!」という声も聞かれます。もちろん音楽専攻の学生にとっては偉大な作曲家(バッハ、ベートーベン、ブラームスなど)を生んだ音楽の国でしょう。しかし、現代のドイツに注目したい理由のひとつには、ドイツが日本をはるかにリードする「環境先進国」であることが挙げられます。

このように言語の学習にプラスしてドイツ関連情報を映画・ドキュメンタリー、ニュース、留学体験談、ドイツからの留学生によるプレゼンテーション、それにドイツのお菓子(ドイツ出張のおみやげ)などを通じて紹介しています。その結果なんとなくドイツ語を選択した学生も、1年後にはドイツ語やドイツ語圏の国々に興味をもってくれるようです。その証拠にオフィスアワーには、長期休暇を利用したドイツ旅行や短期語学研修の相談をよく受けています。

また本学では授業で身に着けたドイツ語能力を客観的に証明するため、「ドイツ語技能検定試験」の受験(4級・3級)

を奨励し、授業とは別に対策講習会も行い、受験する学生を支援しています。なお、この検定試験3級に合格すれば、交流協定校であるドイツのエアランゲン・ニルンベルク大学への交換留学(1年間)の応募資格も得られます。

これからも異文化理解のひとつの手段としての「ドイツ語」を、授業方法にさまざまな工夫を凝らしつつ学生たちとともに楽しく学んでいきたいと考えています。



カナダブリティッシュ・コロンビア州のゆとり生活

音楽教育講座教授 小島 律子

平成16年度文部科学省海外先進教育研究実践支援プログラムにより、3月から4月にかけてカナダのブリティッシュ・コロンビア州に滞在する機会を得ました。目的は芸術統合教育の研究であり、小・中学校で芸術の授業をみるのが中心でした。前半は州都ビクトリア、後半は内陸部のカムループスという小さな町に滞在して、芸術教育に重点を置いている学校を訪ねました。

カナダは人種的にはイギリス系やフランス系の人々が多く、今なお生活ではそのスタイルを維持しており、地理的にはアメリカに接しています。その中でカナダとしてのアイデンティティを見出し、独自の伝統を生み出すのは難しいように思われます。しかし、不思議なことに、それほどアメリカに近いにもかかわらず、音楽教育ではアメリカのように量的なものや目に見えるものに心を奪われることなく、合理的でありながら精神的なものに価値を置く独自の哲学をもつ国です。

生活面ではおらかさが特徴で、現在日本でゆとり教育の反動が出ていますが、日本の小学生から見たら、カナダの小・中学生のゆとり生活は信じられないものだと思います。私の訪問した学校はどこも10人から20人程度の少人数で、教室で輪になって座って議論をしたり、工作室で制作をしたり、フィールドトリップといって校外へ出かけたりし



小学校のダンスの授業の様子

ており、机に向かって勉強という姿はほとんど見ることがありませんでした（写真は小学校のダンスの授業での創作作品発表の様子です）。学校は午後早くに終わり、塾というものもなく、夏休みも3、4ヶ月あるということで、これは芸術重視の学校だけでなく、普通の公立学校でも同様ということです。しかし学力低下の話題は全く出ていません。当然、大学生の勉強量は日本の数倍ということです。

時間的なゆとりがあるのは学校だけでなく、町の人々もだいたい仕事時間は少なく、休暇が長い。どこにお金をかけるかといえば、洋服や家財道具ではなく、キャンプカーとかカヌーやスキー道具といった休暇を楽しむための道具に使っているということです。

カナダの風景はスケールが大きい。さえぎるものがほとんどないカナダの透明な水色の空は、手を伸ばせば届くような近さにあります。そこに大きな白い雲



朝食のベーコンエッグ

がゆったり動いていきます。このようなところにいると、確かに気持ちが大らかになり、日本で時計の秒針を気にして動いていた生活が何だったのだろうと思えてきました。

しかし、食事のおらかさにはまいました。毎回レストランで運ばれてくるお皿を見ただけでお腹がいっぱいになり、日本での料理の微妙で繊細な味わいや盛り付けがなつかしく、帰国日を指折り数えたものでした。もう一つの写真は朝食時のベーコンエッグです。日本の食文化は世界に誇れるものであることを再認識しました。

附属学校紹介

大阪教育大学 附属天王寺中学校

来てよかったと実感できる本物の教育が行われている学校です。

附属天王寺中学校

副校長

中西 一彦

本校は来年(平成18年)創立60周年を迎えます。人間で言えば還暦となり、また初心に戻って新たなスタートを切ることとなります。

60年という年輪を重ねた中で変わらぬものは目の前にいる生徒と真摯に向かい合い、その時最善のものをぶつけるという指導者の姿勢です。またそれを正面から受け止めようとする生徒の気質も不変のものです。本物の教育がそこには存在します。さらに自主性が要求されるのが行事への取り組みです。本校では生徒たちが三人行事と呼ぶ「体育大会」、「学芸会」



学芸会の様子

「音楽会」があり、クラスの団結を図るとともに、学年の発達段階を見事に証明してくれます。特に学芸会はシナリオ作りから大道具、小道具、照明、音響に至るまですべて生徒の手によって作り上げられます。生徒の演出・監督による舞台劇はキャストの卓抜した演技力・表現力により、毎年感動の拍手を呼び起こしています。

また、学年末に催される音楽会においては三年生全員による合唱が会場全体に響き渡り、記憶の中にいつまでも余韻を残してくれます。

新しい流れとしては生徒だけでなく保護者の方も自ら参加することでこの天王寺の良さを体験し実感しようという動きがあげられます。それがPTA公開講座です。最初は生徒たちが受けている授業の保護者版をということが始まりましたが、今では企画も含めて保護者の方と教員が共同で実施する行事となつていきます。これまでに70回近く開かれ、今年度も救命救急講習会や世界遺産見て歩き、大人の数学教室やジャズ入門など興味津々の講座が企画されています。

日々の授業での基礎・基本を充実させる取り組みだけでなく、有する力を思いきり発揮する場の提供も本校の教育には欠かせないものです。それがコンクールへの応募であったり、大会への参加であったりします。例えばそれが高円宮杯全日本中学校英語弁論大会への出場や日本数学オリンピック予選合格につながったり、あるいは全国作文コンクー

ルでの受賞に結びついているのです。また、廃棄車イスを修理してタイやラオスに送るという活動を通して生徒たちは環境について考え、奉仕の心を養い、国際的な視野で物事をとらえていくという経験を積んでいます。

加えてさらなる前進を目指してNIE実践校や国語力向上モデル事業推進校などの指定も受け、本物の教育の深化拡充を図り、発信していくつもりです。それが附属天王寺中学校です。



車椅子をアジア各国へ送る活動を行っています。

NIEは、Newspaper in Education(教育に新聞を)の略で、学校等で新聞を教材にする学習活動のことです。

子どもたちの住まい・まち学習をサポートしています

生活環境講座 助教授 ^{うすだ ともこ} 碓田 智子

よりよい住まいづくりやまちづくりのためには、大人だけではなく、地域の将来を支える子どもたちにも、住まいやまちに関心を持ってもらうことが大切です。その一助として、私の研究室ではゼミの学生と一緒にいくつかの活動に取り組んでいます。

学校教育関係では、八尾市都市計画課、NPO法人八尾住まいまちづくり研究会と協働して、八尾市内の小学校の住まい・まち学習をサポートする活動に参加しています。校区探検や組み立てキットハウスを通じて、子どもたちにまちや住まいについて学んでもらいます。学校教育以外では、大阪市立住まいのミュージアムの子ども学習リフレットの作成を学芸員の方と一緒に進めています。これは、ミュージアムの展示物である江戸時代の大阪の住まいと暮らしの工夫を、子どもたちに楽しく学んでもらうためのものです。また、11月から実施する生活環境講座主催「楽しく学ぶ暮らしの体験教室」の中でも、地域の子どもたちを対象とした住まいの体験教室を開催します。所属する都市住宅学会の活動でも、「親子で学ぶ都市住宅セミナー」を企画し、市民向けの住まいの体験学習講座を11月に実施する計画です。

これらの活動で何よりも重要なのは、子どもたちに住まいやまちづくりに関心を持ってもらいたい、地域の住まいやまちをよくしたいと願う人の熱意と協働だと思います。よりよい住まいづくり・まちづくりに協働できる人を育てることが、私の研究室の役割と考えています。



小学校での組み立てキットハウスの授業

Topics

現代GP、教員養成GPに採択

平成17年度、文部科学省が選定する「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」及び「大学・大学院における教員養成推進プログラム」に以下の3つのプログラムが採択されました。

「知財教育のできる教員養成システムの構築 - 連携による知的創造サイクルと学校教育の結合 - 」
(現代GP) (単独申請)

学校現場で種々の教科において、知的財産教育を行うことができる教員(知的創造サイクル全体を視野に入れ、全体像を理解し教育できる人材)の養成をめざしたシステムを構築するプログラムです。

「大学院における採用前教育プログラムの開発」
(教員養成GP) (単独申請)

大阪府教育委員会が新たに導入する「大学院進学者特別選考制度」を利用し、大学と教育委員会との連携と協働によって、新任教員に求められる実践的指導力を向上させるための新たなプログラムを開発するプログラムです。

「広域大学間連携による高度な教員研修の構築 - 「教育の今日的課題」解決に向けた新研修システムの実現 - 」(教員養成GP) (共同申請)

東北、関東、関西地区の7大学が連携協力することにより、小中学校が直面している新たな課題を解決させるための高度な内容の現職教師向けの研修(連携講座)を実施するプログラムです。

それぞれのプログラムの詳細につきましては、大阪教育大学のホームページでご覧いただけます。

<http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/gp/>

GPとは?

GPとはグッド・プラクティス(Good Practice)の略で、近年、国際機関の報告書等において「優れた取組」という意味で幅広く使われている言葉です。

その頭文字を取り、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の通称を「現代GP」、「大学・大学院における教員養成推進プログラム」の通称を「教員養成GP」と呼んでいます。

「現代GP」とは、社会的要請の強い政策課題に対応した特に優れた教育プロジェクトを選定し、財政支援を行うことで、高等教育の活性化が促進されることを目的とするもので、「教員養成GP」とは、特色ある優れた教員養成教育プロジェクトに対して、財政支援を行うことで、高度な専門性と実践的指導力を兼ね備えた教員の養成及び現職教員の再教育の一層の充実を図り、社会から信頼される学校づくりを進めることを目的とするものです。

平成18年度入試日程(平成18年4月入学)

区 分		出願期間	入試日	合格発表日
教育学部第一部	推薦	11/1 ~ 11/7	11/19・20	12/2
	私費外国人留学生	12/22 ~ 12/28	1/26	2/14
	一般	前期	2/25・26	3/7
			3/12	3/23
教育学部第二部	小学校5年課程	前期	2/25	3/7
		後期	3/12	3/23
	小学校5年課程3年次編入学		1/5 ~ 1/11	2/18・19
	2/18・19		2/18・19	2/23
特殊教育特別専攻科	言語障害教育専攻	1/5 ~ 1/11	2/4	2/23

入試日程に関するお問い合わせは TEL.0729-78-3324までお願いします。

■進学相談会のお知らせ

対 象 者	と き	と ころ
受験希望者・高等学校2年生等	11/3	大阪教育大学 柏原キャンパス
第二部3年次編入学希望者	11/3	大阪教育大学 天王寺キャンパス

進学相談会に関するお問い合わせは TEL.0729-78-3324(柏原キャンパス)または、TEL.06-6775-6605(天王寺キャンパス)までお願いします。

■現職教員や社会人をはじめ広く一般の方々に学習機会を提供するため下記の制度を設けています。

区 分	出願期間	備 考
科目等履修生	教育学部	3月上旬頃
	大学院教育学研究科	3月上旬頃
		出願要項は1月上旬頃配布(予定)

科目等履修生とは、学部又は大学院の正規の授業を聴講して単位を取得できる制度です。各種免許・資格の取得や特定のテーマについて専門的に学びたい方などが受講されています。また、本制度により取得した単位は、学部又は大学院の正規学生として入学後の単位に換算することができます。

科目等履修生に関するお問い合わせは TEL.0729-78-3297までお願いします。

区 分	出願期間	備 考
研 究 生	教育学部	2/6 ~ 2/10
	大学院教育学研究科	2/6 ~ 2/10
	教育学部(外国人留学生)	12/5 ~ 12/9
	大学院教育学研究科(外国人留学生)	12/5 ~ 12/9
		出願要項配布中

研究生とは、学部又は大学院を卒業・修了された方が、ある特定の研究テーマに対して指導を受け、あるいは授業を聴講する制度です。(聴講した授業に対する単位の認定は行いません。)

研究生に関するお問い合わせは TEL.0729-78-3297までお願いします。

『天遊』とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。



本誌にご意見をお寄せください

本誌『天遊』は今後の誌面づくりに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどをお聞かせください。

- 宛先 〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1
国立大学法人大阪教育大学企画課
TEL.0729-78-3344 FAX.0729-78-3225
E-mail kikaku@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

ホームページ <http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/>

教員・学生の活動をHPで紹介しています。



大阪教育大学の教員や学生の最新活動情報を紹介した「教員・学生の活動紹介」を開設しました。
<http://yume.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/info/>
教員・学生等の活動情報を随時更新しておりますので、是非ご覧下さい。

R100

古紙配合率100%の再生紙を使用しています。

PRINTED WITH SOY INK
アロマフリー型大豆油インキを使用しています。